平成二十七年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜　全日制の課程

Ⅱ　国　語

注意事項

1　開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

2　問題は **問五** まであり、1ページから13ページに印刷されています。

3　答えは、解答用紙の決められた欄（らん）に、はっきり書き入れなさい。

4　解答用紙にマス目（例：□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

5　終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受検番号	
	番

問一　次の問いに答えなさい。

(ア)　次の各文中の――線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代かなづかいで書きなさい。

1　親友との愉快な会話に時間を忘れる。
2　適切な加療によって傷が治癒した。
3　経済協力を通して両国が緊密に結びつく。
4　心の赴くままに旅を楽しむ。

(イ)　次の各文中の――線をつけたカタカナを、漢字に直しなさい。（楷書で大きく、丁寧に書くこと。）

1　窓外のゼッケイに思わず見とれる。
2　効果的な方法によりフッキンを鍛える。
3　飛行機のソウジュウには訓練が必要だ。
4　発掘された土器の鑑定を専門家にユダねる。

(ウ)　次の文中の――線をつけた「で」のうち、同じはたらきをするものの組み合わせとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

古い資料で(ア)町の歴史を調べようと思い、図書館へ自転車で(イ)出かけたが、適切な資料がなかなか見つからないので(ウ)、お茶でも飲んで(エ)気分転換をしようと思った。

1　アとイ　　2　アとウ　　3　イとウ　　4　イとエ

(エ)　次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

胡桃割るこきんと故郷鍵あいて　　林翔

1　故郷への思いをあえて捨て去ろうとする強い決意が、「胡桃」「こきん」「故郷」「鍵」という固い語感のあるカ行の音を多用することによって印象的に描かれている。
2　胡桃が割れてしまった音とともに作者の心の中の大切な思い出が壊れてしまったことが、「故郷」という懐かしい響きのある語によって感傷的に描かれている。
3　胡桃の固い殻が割れたことをきっかけに、心の中にしまわれていた故郷への思いがわき上がってくる様子が、「こきん」という音によって効果的に描かれている。
4　胡桃の固い殻が割れたときに、忘れてしまいたい故郷の記憶が呼び起こされた様子が、鍵を開ける音のもつ印象と重ねることによって象徴的に描かれている。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

宋（注）の周茂才とて、有徳なる人（裕福な人）あり。算漢（計算や学問の知識があって物の売り買いを職業として）に達して売買を業とし、財をまうくること、夜に日に多く、大福人（非常に裕福な人という評判を得ていた）の名をほどこしけり。ひそかに斗（注）と秤（注）と尺（注）とを二様にこしらへ、[1]軽く細きをもつて量り出だし、重く長きをもつて納め入るるほどに、利潤はなはだ強し。その妻張氏は、智恵たけて、賢なる人なり。かたち世にすぐれて（大変美しくて）、心ざしあはれみ深し。しかるに妻は、この有様を見て、大いに嘆く色あり。その舅姑の前に行きて、「われこの家の妻となり、末久しくあるべしとも思はず（この状況が長く続くはずだとは思いません）。もしそのうちに、子を生みたらば、子ともろともに家滅び、科（罪に問われるとき、自分がしてしまった行いであるかのように）にあはん時、みづからがいたしける業のやうに人の申さんも心うかるべし。家の滅びは近きにあるべし。[2]ただ、いとまを給はりて、かへりはべらん。」と言ふ。周才美（注）聞きて、大いにおどろき、はづかしく思ひ、「汝の言ふ所まことに天道（天の神のようにおそれ多いことである）のおそれあり。災ひの来たらんことは、かならず遠からず。今より後は、この小さく細き斗秤をうち破り捨つべし。」と言ふ。妻のいはく、「それいまだ、[3]みづからが思ふ心に足らざることあり。さてその二様をば、何年ばかり使ひ来たれる。」と言ふ。周才美がいはく、「二十余年このかたなり。」と。妻のいはく、「みづからをこの家にとどめて、君（あなたの両親に）が親たちにつかうまつらしめんと思ひたまはば（お仕えさせようと）、今よりして量りとるべき物は小斗にてとり、人に渡す時は大斗にて量り出だし、物を買ふ時は重き秤、短き尺にてとり、売る時は軽き秤、長き尺にて渡し、二十余年のあひだ、これをもつて先のくらましける科を償ひたまはば、みづからこの家にとどまりはべらん。」と言ふ。周才美深く感じて、かくのごとくにせしかば、家栄えけり。

（「堪忍記」から。）

（注）宋＝中国の王朝名。
斗＝分量を量る道具。マス。
秤＝重さを量る道具。量り。
尺＝長さを測る道具。物差し。
周才美＝「周茂才」と同じ人物。

(ア) ――線1「軽く細きをもつて量り出だし、重く長きをもつて納め入るる」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 より多くの利益を得るために、品物を売るときと仕入れるときで別々の斗と秤と尺を使い分けていたということ。

2 より多くの利益を得るために、安く仕入れた品物が高くなるまで長い期間蔵の中に保管してから売り出したということ。

3 より多くの客を集めるために、品物を買うときは客自身が斗と秤と尺を使ってはかるようにさせていたということ。

4 より多くの客を集めるために、損することを覚悟のうえで日によって仕入れた値段よりも安く売っていたということ。

(イ) ――線2「ただ、いとまを給はりて、かへりはべらん。」とあるが、「妻」がそのように言った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「周茂才」が自分の意見を聞き入れずに強引な商売を続けたために、家を滅ぼしてしまったことがとても悔しかったから。

2 「周茂才」がこれまでの行動を改めることで商売の利益を得られなくなり、日々の生活も苦しくなることが予想されたから。

3 「周茂才」が仕事に関心をもたず、家族のために多くの利益を得る手立てを全く考えていないことにあきれたから。

4 「周茂才」が客をあざむいた行為に自分も荷担していたと思われるのがつらいうえに、家は滅びるに違いないと思ったから。

(ウ) ――線3「みづからが思ふ心に足らざることあり。」とあるが、その意味として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 私はこの家に災いがくるなどとは思っていません。

2 私が考えている償い方として十分ではありません。

3 私はご両親にお仕えする気持ちをもっていません。

4 私がもらいたいと思っている金額として足りません。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「妻」は、「周茂才」の仕事のやり方に不安をつのらせて子どもと一緒に実家に帰ろうとしたが、「周茂才」の両親に説得された。

2 「周茂才」は、「妻」が実家に帰ってしまうことによって天の神から災いがもたらされることを心配して、仕事のやり方を改めた。

3 「妻」は、人々をだまし続けてきた行為の償いとして「周茂才」に品物をはかる道具の使い方を変えさせたところ、家は大いに栄えた。

4 「周茂才」は、それまで使っていた品物をはかる道具を壊すことによって人々に対して誠意を見せたので、「妻」も納得して家にとどまった。

問三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

若いころ丑松は、小田原の竹細工店、籠富で、竹の仕事を仕込まれた。同僚にもう一人、誠一という男がいた。同僚といっても、親方富蔵の倅である。いずれは籠富を継ぐ身分だった。

富蔵は二人を分けへだてしなかった。分けへだてなく、厳しく仕込んだのである。富蔵の妥協を許さない一徹さに、二人はしばしば音を上げそうになった。そのたびに二人は励まし合いかばい合って苦を共にした。そうして時を重ねるにつれて、丑松と誠一は兄弟のような間柄になっていった。

やがて誠一が所帯を持ち、富蔵が表面から退くと、それを機に丑松も籠富を離れて独立することにした。「おれ一人では心細いからいてくれろ。」としきりに頼む誠一に、[1]丑松は「すまねえすまねえ。」をくり返して、意志を通した。丑松にも、一人になって自分の力を試してみたいという、若さの持つ勢いがあった。

幸いにもそのころは、竹の仕事はたくさんあった。小田原同様、この熱海でも、観光客相手に干物がよく売れた。その器に用いる皿籠である。世津を妻に迎えるころには、仕事量も一段と増えた。観光客が大挙して押し寄せる季節ともなると、いくら夜なべをしても追いつかないほどであった。もちろん注文は皿籠ばかりではない。農作業の道具としての背負籠、箕、腰籠、あるいは台所用の笊、さらには脱衣籠やくず籠、そばせいろからおしぼり受けまで、あらゆる人たちからの様々な注文がひきも切らずあった。干物の皿籠に追いまくられながらも、それらの注文もこなして、丑松は朝から晩まで休むことなく手を動かしつづけた。たぶん丑松の籠屋生活の中で、最も充実した時期だっただろう。

そんな時代が十年余りも続いたあと、[2]事態は一変した。プラスチックやポリエチレンなどの石油化学製品の台頭である。まず、干物の皿籠がプラスチックにとって代わられた。それは徐々に注文が減っていくというような、なまやさしいものではなかった。ある日ぱったりと、いっさいの注文が打ち切られた。寄せた波が引いたまま、二度と打ち寄せて来なくなったような感があった。農業用の竹製品や台所用品などは、それでもまだ引き続き注文があったが、それらもいずれは新素材の製品にその場をうばわれていく。なんといっても石油化学製品の方が、圧倒的に廉価(注)であった。仕事量は激減した。同業の者の中では、廃業や転業が相次いだ。

ある日世津は、「わたし、ゴルフ場へ行く。」と言って、次の日から雑木林のけもの道を抜けて、ゴルフ場のクラブハウスに通うようになった。子供たちが手を離れるまでのそれからの数年間、世津はクラブハウスの厨房で皿洗いをすることになる。

世間では、日増しに車が普及するなどして、豊かさへ、より豊かさへと上方目指して進む気分があった。その中で[3]丑松は、一人停滞に甘んじた。

[4]誠一に会いたい、と丑松は思った。こんなとき、誠一ならどうするだろう。

「やるしかねえよ。」そんな誠一の声が聞こえてきそうな気がした。「ほかになんにもできねえんだから。」

その通りである。丑松もよく口にする言い草である。彼らがこう言うときは、その裏に、そのかわりこれをやらせればいい仕事をしてみせる、というささやかな矜持(注)が秘められている。――誠一はどうしているだろう。

丑松の気持ちを察したかのように、ある日、誠一から一枚の葉書が届いた。きちんと印刷した案内状である。「籠富誠一竹工芸展」という太い文字が目を引いた。

結婚式と葬式にしか履かない黒い革靴を履いて、丑松は展示会場のある横浜のデパートへ出かけた。

開場時刻からほどない頃だったが、場内はすでに三三五五集まって来た人々でにぎわっていた。

「ずいぶんと盛況だ。」

つぶやきながら丑松は、まず誠一の姿を探そうとしたが、思い思いに往き来する人の林の中、すぐに見つけ出すのはむずかしかった。

明るい照明の下には、表面を畳表で化粧した腰の高さほどの台に、誠一の手になる竹製品の数々が、一点また一点と並んでいた。花器、小物入れ、色紙掛けなど、それらの品々を、丑松は手前から順に見てまわった。どれも意匠(注)をこらした見事なものばかりだったが、中でもとりわけ、円筒形の作品に、丑松の目はくぎ付けになった。それは糸のように細い竹ひごで作られていた。丹念に編み込まれた竹ひごは、女性の長い黒髪が肩にかかるような按配に、ゆるやかな曲線を描きながら筒の側面を流れ、優美ともいうべき趣をかもしだしていた。わきから電気のコードがのぞいているところをみると、中で電灯がともるようになっているらしい。けれど電気スタンドの用には役立たないことも一目でわかる。どうやら、編み込んだ竹ひごのすき間からもれ出る光の模様を見て楽しむためのものであるらしかった。いわば装飾用の置き物である。

丑松はうなった。編みもさることながら、ここまで細く均一な竹ひご作りは、誠一でなければできない仕事である。丑松はその場を動けなくなった。

右に左に視点を変えて、編みとひごとの均衡に、一心に見入っている丑松に、

「丑松つぁん。」

背後から声をかける者がいた。ふり向くとそこに、誠一のはにかんだような顔があった。きちんとネクタイをしめ、ジャケットを着こんでいる。先ほど丑松が誠一を見つけようとしたとき、会場内にいた人物である。作業着姿の誠一しか知らない丑松には、それとわからなかっただけであった。

「よく来てくれたねえ。会いたいと思っていたところだ。」

誠一の方からそう言った。誠一に会ったらああも言おう、こうも話そうと心づもりをしてやって来た丑松だったが、細ひごの作品を前にしたとたん、そんなものは霧散してしまっていた。

「おい、これはたいしたもんだなあ。」

いきなり丑松は感嘆の声を上げた。

「いや、おはずかしい。」

誠一はいっそうはにかんだ。

「いや、たいしたもんだ。」

丑松にはそんな言葉しか見つからなかったが、それでも心からの賛辞のつもりだった。

「奥さんは元気かね。」

と誠一が聞いた。丑松は素直に、世津がゴルフ場で働いていることを打ち明けた。そんなことも誠一になら安心して話せた。誠一はゆっくり二回うなずいた。その目には蔑みや同情の色はなかった。むしろ共感があった。

「どこも一緒だよ、丑松つぁん。うちだって苦しい。」

誠一は声を落としてそう言った。熱海も小田原も、事情は同じだった。主力である干物の皿籠を失ったことは、籠富にとっても大きな痛手であることに変わりはなかった。しかも誠一は先年、仕事場を兼ねた店舗を拡張したところだった。

「どうだね丑松つぁん。あんたもこんなものをやってみちゃあ。こういうものならわりと引き合いもあるだよ。」

誠一は小声のまま、さらにそう続けた。

「いやあ、おれには似合わねえ。」

今度は丑松がはにかんだ。丑松の頭に真っ先に浮かんだのは、おれにはネクタイは似合わねえ、という

ことだった。誠一は会場を見渡して、

6「こうでもしなきゃあ、籠富の看板が守れなくてなあ。」

とつぶやいた。その声は丑松に、誠一のため息のように聞こえた。

あとで一緒に飯でも食おうと誠一が言うので、丑松はしばらくソファーに坐って待っていたが、誠一は次々と現れる来場者に声をかけられ、あるいは「先生」と呼ばれてとりまかれ、なかなか体の空くいとまがなさそうだった。おれがいつまでもここにいるのも具合が悪かろうと、察しをつけた丑松は腰を上げた。誠一は丑松を見送りながら、「すまねえすまねえ。」と、丑松が籠富を去るときに口にしたのと同じ言葉を、なぜかしきりにくり返した。

「なにをあやまることがある。これでいいだ。誠さん、あんたはこれでいいだ。」

そう言うかわりに丑松は、近いうちにまた会うことを約して、笑顔で別れた。

帰りの電車の中で、丑松は複雑な気持ちでいた。誠一の展示会の盛況は、丑松もわが事のように嬉しかった。しかしその一方で、寂しくもあった。あのような製品を作ることでしか、もう籠屋の生き残る道はないのだろうか、とくり返し思った。誠一の作品は確かに見事なものばかりだったが、どう見てもあれらは人が手にする道具ではない。そのことが丑松は気になってしかたがなかった。使う人の手のことを考え、製品の使い勝手のことだけを考えて、竹を編みつづけてきたおれのこれまでの生き方は、一体なんだったのだ、そう思うと丑松は胸の中が寒くなった。さらに、土から生い出ずる素材などというものは、次第に無用の物と見なされ、いずれは軽んじられる日が来るという、強い予感があった。

履き慣れない靴ですっかり足を痛くして帰った丑松は、その夜、晩酌の量がことのほか多かった。すっかり酔いのまわった体に好物のそばを流し込むと、這うようにして寝床に向かいながら、

「おれは籠屋だ！」

胸のつかえを吐き出すように、一声叫んだ。濡れ布巾で卓袱台をふいていた世津が、

7「これまでもそうだったんだから、これからだって……。」

ぶつぶつと小声でつぶやいた。

それからの丑松は、どうしてもこの男の手になるものでなければ気がすまぬという人たちの依頼に、丁寧な仕事で応えることで、静かな日々を送りつづけた。

（石川　たかし「竹とんぼの坂道」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）廉価＝安い値段。　矜持＝自分の能力を信じていだく誇り。
　　意匠をこらした＝工夫をめぐらした。

(ア)――線1「丑松は『すまねえすまねえ。』をくり返して、意志を通した。」とあるが、そのときの「丑松」の気持ちとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　自分が店を出すことで、「籠富」の客を奪ってしまうことを「誠一」にわびようとする気持ち。
2　自分の力だけで店を出すことへの不安を、「誠一」と共有することで振り払おうとする気持ち。
3　「誠一」に申し訳なく思いながらも、自分の技量がどれだけ通用するのか確かめたいという気持ち。
4　自分が「籠富」を出ることで、引退した「富蔵」に活躍の場を与えて奮起させようという気持ち。

(イ)――線2「事態は一変した。」とあるが、「一変した」内容について、原因を含めて、次の条件を満たし、**全体で三十字以上四十字以内の一文**で書きなさい。

書き出しの　以前はたくさんあった竹の仕事が、　という語句に続けて書き、文末は、　ということ。　で終わること。これらも全体の字数に入れること。

(ウ) ――線3「丑松は、一人停滞に甘んじた。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「誠一」の励ましを受けたが、自分の生き方はこのままでよいと思い、頑固に自分の道を貫いた。
2 「世津」がゴルフ場で働きはじめたのに、自分は新しい仕事を見つけようという努力をしなかった。
3 豊かさを求めて周りが変化していく中、籠屋の仕事を拡大していけない自分に失望していた。
4 時代の流れに取り残されながらも、それまでの籠屋の仕事のやり方を変えられずにいた。

(エ) ――線4「誠一に会いたい、と丑松は思った。」とあるが、「丑松」がそのように思った理由を説明した次の文の□に入れる語句を、これよりあとの本文中から**十字**で抜き出して書きなさい。

「丑松」は、竹の仕事に関して□というひそやかな思いをもっており、同じ思いを共有できる仲間である「誠一」の考えを聞きたいと思ったから。

(オ) ――線5「丑松はその場を動けなくなった。」とあるが、そのときの「丑松」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「誠一」の作品に彼ならではの技術力が見事に発揮されているのを見て取り、感動している。
2 「誠一」の作品が実用を軽視した作りになっているのを見て、職人仲間として失望している。
3 「誠一」の作品が見かけ倒しの技術で作られていることを見抜き、職人として見下している。
4 「誠一」の作品に自分が表現できなかった芸術性の高さを感じ取り、強い敗北感を味わっている。

(カ) ――線6「こうでもしなきゃあ、籠富の看板が守れなくてなあ。」とあるが、「誠一」の言葉を聞いたとき「丑松」はどのように思ったか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 自分への説得をあきらめた「誠一」が、あえて弱みを見せることによって、かつての友情を壊さないように話を合わせてくれている。
2 経営のことを最優先して「籠富」を守らなければならない「誠一」は、自分には職人として誇りをもって生きてほしいと願ってくれている。
3 「誠一」は、展示会をしなければ「籠富」の維持ができないほど厳しい状況になってしまったことに責任を感じ、店を継いだことを後悔している。
4 「誠一」は、店舗を拡張したり展示会をしたりして成功しているように見えるが、「籠富」を守るためには意に反することもして苦労している。

(キ) ――線7「これまでもそうだったんだから、これからだって……。」とあるが、ここでの「世津」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 展示会が成功していた「誠一」に対し闘志を燃やす「丑松」に共感し、これからも夫を支えていく決意を「丑松」に伝えるように読む。
2 「丑松」の心の動揺を察しながらも、器用には生きられない「丑松」に寄り添っていこうと自分に言い聞かせるように読む。
3 世渡りが下手で家族を養うことに関心のない「丑松」を変えられないことで、これからの暮らしに不安を感じているように読む。
4 すべてのことに投げやりな「丑松」のことを冷静に受け止めながら、何とか籠屋を続けさせようと「丑松」をなだめるように読む。

問四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

いぜんには、なにに向かって読むということもなしに、手あたり次第に読み、途中で立ちどまって書物からひき出されるとりとめもない空想や感想にふける、という読み方をする時間があった。貸本屋がどこにでもあった頃で、時代小説や推理小説を借りては読み、借りては読みして、とうとう近所の貸本屋の大衆小説の棚には目新しい本はなくなってしまったこともあった。

1 その体験には本を読むということの、ほんとうに大切な部分があったような気がする。本を読むということは、ひとがいうほど生活のたしになることもなければ、社会を判断することのたしになるものでもない。また、有益なわけでも有害なわけでもない。生活の世界があり、書物の世界があり、いずれも体験であるにはちがいないが、どこまでも二重になった体験で、どこかで地続きになっているところなどないから、本を読んで実生活の役に立つことなどはないのである。

また、世界を判断するのに役立つこともない。書物に記載された判断をそのまま受け入れると、この世界はさかさまになる。重たいのは書物の判断で、軽いのは現実の体験からくる判断だというように。これがすべて優れた書物であればあるほど多量にもっている毒である。そこで、書物の判断は、いつもパズルを解くような反訳(注)をしてからでないと、現実には受け入れられないようにできている。

書物がそういうものであるとすれば、読むことの中心には、いつも、なにに向かって読むのか、ということを〈無〉にしてしまうものがあって然るべきだ、といったほうがいい。

あなたはなにに向かって読むのか？

こういう本質的な問いにたいして、いまのわたしは、たぶん答える資格を欠いている。学生が試験に向かって読み、学者が研究に向かって読み、司法家が法律に向かって読み、実務家(注)が利潤に向かって読み、といったことと、あまり変わりのない読み方しかしていないからである。そして、こういう読み方は、読書の中心にある大切なものを欠いた読み方にしかすぎない。

図書館にゆくと、すべての書物は、誰かによって手をつけられていることがわかる。けれど、たぶんほんとうに読まれたのではなく、なにかの役に立てようとして読まれる方がほとんどなのだ。余裕もなく、はやく結論がみつけられないかどうかと焦りながら。そして、書き手もまた、読み手のせき込みに応じようとして、なにかに尻をたたかれながら書物をつくりあげたという書物が、ほとんどであるかもしれない。

ある書物がよい書物であるか、そうでないかを判断するために、普通わたしたちがやっていることは誰でも類似している。自分が比較的得意な項目、自分が体験などを総合してよく考えたこと、あるいは切実に思い患っていること、などについて、その書物がどう書いているかを、拾って読んでみればよい。よい書物であれば、きっとそういうことについて、よい記述がしてあるから、だいたいその箇所で、書物の全体を占ってもそれほど見当が外れることはない。

A　、自分の知識にも、体験にも、まったくかかわりのない書物に行き当たったときは、どう判断すればよいのだろうか。

それは、たぶん、書物にふくまれている世界によってきめられる。2 優れた書物には、どんな分野のものであっても小さな世界がある。その世界は書き手のもっている世界の縮尺のようなものである。この縮尺には書き手が通り過ぎてきた〈山〉や〈谷〉や、宿泊した〈土地〉や、出会った人や、思い患った痕跡などが、すべて豆粒のように小さくなって籠められている。どんな拡大鏡にかけても、この〈山〉や〈谷〉や〈土地〉や〈人〉は、眼には視えないかも知れない。

そう、じじつそれは視えない。視えない世界が含まれているかどうかを、どうやって知ることができるのだろう？

B 、ひとつの書物を読んで、読み手を引きずり、また休ませ、立ちどまって空想させ、また考え込ませ、ようするにここは文字のひと続きのようにみえても、じつは広場みたいなところだな、と感じさせるものがあったら、それは小さな世界だと考えてよいのではないか。

この小さな世界は、知識にも体験にも理念にもかかわりがない。書き手がいく度も反復して立ちどまり、また戻り、また歩きだし、そして思い患った場所なのだ。かれは、そういう小さな世界をつくり出すために、長い年月を棒にふった。棒にふるだけの価値があるかどうかもわからずに、どうしようもなく棒にふってしまった。そこには書き手以外の人の影も、隣人もいなかった。また、どういう道もついていなかった。行きつ戻りつしたために、そこだけが踏み固められて広場のようになってしまった。

じっさいは広場というようなものではなく、ただの踏み溜まりでしかないほど小さな場所で、そこからさきに道がついているわけでもない。たぶん、書き手ひとりがやっと腰を下ろせるくらいの小さな場所にしかすぎない。けれどそれは世界なのだ。そういう場所に行き当たった読み手は、ひとつひとつの言葉、何行かの文章にわからないところがあっても、書き手をつかまえたことになるのだ。

わたしは、[3]なぜ文章を書くようになったかを考えてみる。心のなかに奇怪な観念が横行してどうしようもなくもて余していた少年の晩期のころ、しゃべることがどうしても他者に通じないという感じに悩まされた。この思いは、極端になるばかりであった。とうとう、誰からも無口だといわれるほど、この感じは外にもあらわれるようになった。父親は、おまえこのごろ覇気がなくなったというようになった。過剰な観念をどう扱ってよいかわからず、しゃべることは、自分をあらわしえないということに思い患っていたので、覇気がなくなったのは当然であった。

われながら、青年になりかかるころの素直な言動がないことを認めざるをえなかった。いまおもえば、〈若さ〉というものは、まさしくそういうことなのだ。他者にすぐ判るように外に出せる覇気など、どうせ、たいした覇気ではない、と断言できるが、そのとき、そういいきるだけの自信はなかった。

そうして、しゃべることへの不信から、書くことを覚えるようになった。それは同時に読むようになったことを意味している。

わたしの読書は、出発点でなにに向かって読んだのだろうか。たぶん、自分自身を探しに出かけるというモチーフ(注)で読みはじめたのである。自分の思い患っていることを代弁してくれていて、しかも、自分の同類のようなものを探しあてたいという願望でいっぱいであった。すると書物のなかに、あるときは登場人物として、あるときは書き手として、同類がたくさんいたのである。

自分の周囲を見わたしても、同類はまったくいないようにおもわれたのに、書物のなかでは、たくさん同類がみつけられた。そこで、書物を読むことに病みつきになった。深入りするにつれて、読書の毒は全身を侵しはじめた、といまでもおもっている。

ところで、そういうある時期に、わたしはふと気がついた。自分の周囲には、あまり自分の同類はみつからないのに、書物のなかにはたくさんの同類がみつけられるというのはなぜだろうか。

ひとつの答えは、書物の書き手になった人間は、自分とおなじように周囲に同類はみつからず、また、しゃべることでは他者に通じないという思いに悩まされた人たちではないのだろうか、ということである。もうひとつの答えは、自分の周囲にいる人たちもみな、じつはしゃべることでは他者と疎通しないという

思いに悩まされているのではないか。ただ、外からはそう視えないだけではないのか、ということである。

4 後者の答えに思いいたったとき、わたしは、はっとした。わたしもまた、周囲の人たちからみると思いの通じない人間に視えているにちがいない。

うかつにも、わたしは、この時期にはじめて、自分の姿を自分の外で視るとどう視えるか、を知った。わたしはわたしが判ったとおもった。もっとおおげさにいうと、人間が判ったような気がした。

もちろん、前者の答えも幾分かの度合で真実であるにちがいない。しかし、後者の答えのほうがわたしは好きであった。

（吉本（よしもと）　隆明（たかあき）「読書の方法」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）反訳＝一度言葉を置き換えて考えたものをもとの言葉や文字にもどすこと。
実務家＝実務に熟練した人。ここでは、事業を営む人たちのこと。
モチーフ＝絵画・彫刻・小説などにおいて、表現の中心的な動機となるものごと。ここでは、動機のこと。

(ア) 本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　A　だから　　B　なぜ　　2　A　つまり　　B　まさか
3　A　また　　B　おそらく　　4　A　だが　　B　もし

(イ) ――線1「その体験には本を読むということの、ほんとうに大切な部分があった」とあるが、その内容を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　手に触れた本を次から次へと読んで書物の世界に没頭することで、何かの役に立てようなどと考えないこと。
2　生活のたしや社会を判断することのたしにするために有益な本を見分ける力を養い、自分独自の世界を深めること。
3　読書によって空想や感想にふけりながらも、最終的には書物に記載された内容を受け入れて多くの知識を得ること。
4　優れた書物であればあるほど多量にもっている毒を、パズルを解くように丁寧に読み進めることで受け入れること。

(ウ) ――線2「優れた書物には、どんな分野のものであっても小さな世界がある。」とあるが、その「小さな世界」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　読み手を引きずり込むために様々に表現を工夫して文字にした、書き手の思考のみちすじ。
2　長い年月をかけて考え苦しむ中で踏み固められた、書き手の思いが凝縮されている場所。
3　自分の経験をまとめて作り上げた、読み手が決してたどりつけない書き手が通り過ぎてきた場所。
4　自分の理念に基づいて、他者に誤りなく伝えるために検証を繰り返し固めてきた書き手の主張。

(エ) ――線3「なぜ文章を書くようになったか」とあるが、その理由を端的に表した語句を、これよりあとの本文中から**十字**で抜き出して書きなさい。

(オ) ――線4「後者の答えに思いいたったとき、わたしは、はっとした。」とあるが、その理由について、次の①、②の条件を満たし、**全体で百字以上百十字以内の一文**で書きなさい。

① 書き出しの 自分の周囲にいる人たちもみな、 という語句に続けて書き、文末は、 ということを知ったから。 で終わること。これらも全体の字数に入れること。

② 「後者の答え」の内容を明らかにすること。

(カ) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 本を読むということの効用について、優れた本に展開された理論と具体的な実践をもとに説明したうえで、読むことと書くこととが本質的に同じ営みであるという最初の主題に戻っている。

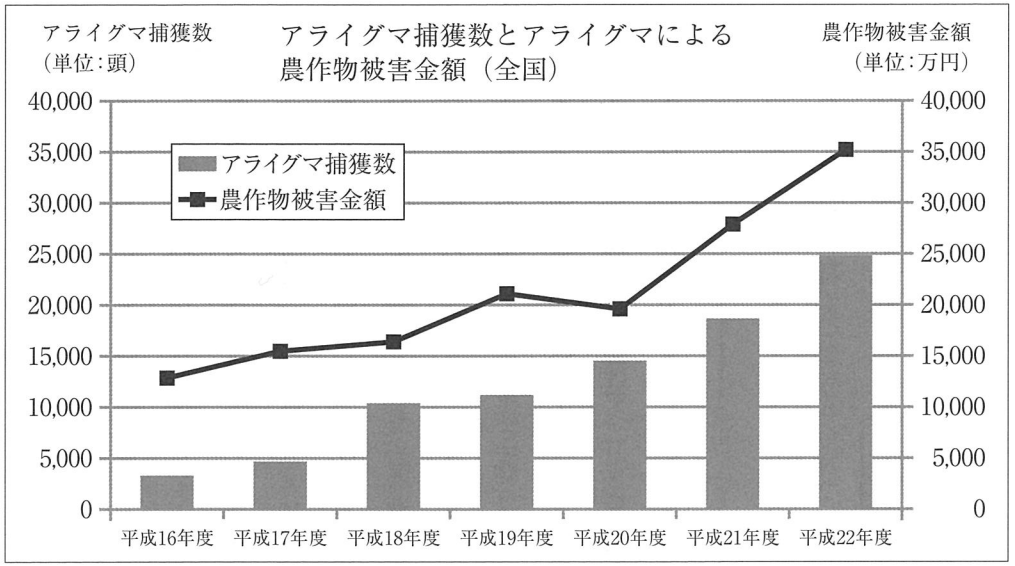
2 図書館にあるすべての書物が誰かによって手をつけられているという発見から、読み手ははやく結論をみつけることに焦るあまり書き手の意図が全く伝わらないという対立の構図を示している。

3 本を読むということの本質的な意味と優れた本の条件という二つの観点から、読書に対する考え方を論じるとともに、読書を通して自分の人間に対する見方が大幅に変わった経験を述べている。

4 本を読むことによって書物のなかには自分の同類がたくさんみつけられたという体験から、少年時代は積極的に読書に親しんで、本のなかにいる仲間をみつけるべきであるという結論に導いている。

問五　中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、「総合的な学習の時間」に自然環境の保全について調べ、話し合いをしている。次の**グラフ**、**資料**と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

グラフ



「環境省の鳥獣関係統計等」「農水省生産局農業対策課鳥獣災害対策室資料」より作成。

資料

石川県金沢市内の自然園内にあるトンボ保護区の池では、いつの間にか特定外来生物のオオクチバス（ブラックバス）が繁殖し、ヤゴなどの水生生物の聖域が破壊されつつあった。２００１年、対応策としてオオクチバスの駆除を実行することが決まり、トンボ保護区の環境はオオクチバスが侵入する以前の状態に戻ると期待された。

ところが翌年になると、それまでオオクチバスに捕食されていたアメリカザリガニの大発生が起こり、その結果、50種以上も確認されたトンボや、生育環境の中心をなす水草が激減するという事態に陥った。その後１万匹以上ものアメリカザリガニの駆除を行ったものの、大きな効果はあがらず、その繁殖力の強さから保護区の環境は以前よりも悪化するという結果を招いた。

（松井　正文「外来生物クライシス」から。）

Aさん　私たちは、自然環境の保全について調べてきたのですが、今回は二千種類以上いると言われる外来生物の問題について話し合いたいと思います。まず、外来生物とはどういうものでしょうか。

Bさん　ブラックバスやタイワンリスのように、国外から入ってきた生物を言います。

Cさん　私は、農作物や人に直接被害をもたらすものとしてとらえています。**グラフ**は、全国におけるアライグマ捕獲数とアライグマによる農作物被害金額です。これによると、［　　］ということが読み取れます。被害を軽減するためには、さらに積極的に外来生物の捕獲を進めていく必要があるのではないでしょうか。

Dさん　ところが、捕獲をすれば解決するというほど簡単な話ではないようです。**資料**からは、ブラックバスを駆除して生態系を以前の状態に戻そうとしたところ、天敵のいなくなったアメリカザリガニの大発生によって、トンボや水草などが激減してしまい環境が悪化したことがわかります。

Cさん　自然環境に大きな影響を与える外来生物が一度定着してしまうと、それを駆除しても生態系を以前の状態に戻すのは、とても難しいということですね。

Bさん　そう思います。そこで外来生物を駆除するという発想だけではなく、自然界で多様な生物がバランスを保って生きていることを意識する必要があります。

Aさん　それでは自然環境を保全するために、具体的にどのような取り組みが考えられるでしょうか。

Cさん　家族旅行で小笠原諸島の父島に行く船に乗るときにマットが敷いてありました。これは靴底についた小さな生物や植物の種などをふきとるためのものだそうです。一度入り込んだ外来生物は駆除することが難しいので、まずは、外来生物をむやみに持ち込まないことが大切です。

Bさん　私たちと外来生物の身近な関わりとしては、ペットのことが挙げられます。ミドリガメの愛称で知られているミシシッピアカミミガメは、売られている時は五センチメートル程度ですが、育つと二十センチメートル以上にもなり、無責任にも飼い主が捨てる例が多いと聞きました。

Dさん　そういえば**グラフ**のアライグマは北アメリカにいる生物ですが、かつてのテレビアニメがきっかけになって、ペットとして広まったそうです。飼われていたアライグマが逃げ出したり捨てられたりして繁殖しました。アライグマは成長すると荒々しい性質になるそうです。飼うときは責任をもって管理することが重要です。

Aさん　ここまで、自然環境を保全するために、私たちが意識するべきことと具体的な二つの取り組みについて話してきましたが、それぞれの内容については、Bさん、Cさん、Dさんがまとめてくれていたように思います。それらをふまえ、自然環境の保全について改めて整理すると、

「私たちは、
　　取り組むべきだ。」

とまとめられると思います。

私たちも外来生物との関わり方を通して、自然環境の保全を心がけるようにしましょう。

(ア)　本文中の［　　］に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　平成22年度までの七年間では、アライグマの捕獲数が増えるのにしたがって、農作物被害金額は減少している傾向が見られる

2　平成18年度から平成22年度にかけて、アライグマの捕獲数が二倍を超えているにもかかわらず、農作物被害金額も二倍を超えている

3　平成22年度までの七年間では、アライグマの捕獲数は五倍に増えているが、農作物被害金額も右肩上がりに増え続けている

4　平成20年度から平成22年度にかけて、アライグマの捕獲数が急増するとともに、農作物被害金額も三倍に膨れあがっている

(イ)　本文中の［　　］に適する「Aさん」のことばを、次の①、②の条件を満たし、**全体で七十字以上八十字以内の一文**で書きなさい。

①　書き出しの［私たちは、］という語句に続けて書き、文末は、［取り組むべきだ。］で終わること。これらも全体の字数に入れること。

②　「私たちが意識するべきこと」「具体的な二つの取り組み」という点に触れていること。

（問題は、これで終わりです。）

Ⅱ 国語 解答用紙

（平成二十七年度）

受検番号	番	氏名

問一

(ア) 1 3　(イ) 1 3

(ウ) 2 4　(エ) 2 4

各二点

（く）　（ねる）

問二

(ア)　(イ)　(ウ)　(エ)

各四点

問三

(ア)

(イ) 以前はたくさんあった竹の仕事が、

40　30

(ウ)　(エ)　(オ)　(カ)　(キ)

10

(ア)二点、(イ)六点、他は各四点

問四

(ア)　(イ)　(ウ)　(エ)

10

(オ) 自分の周囲にいる人たちもみな、

100　110

(カ)

(ア)二点、(オ)六点、他は各四点

問五

(ア)

(イ) 私たちは、

80　70

(ア)四点、(イ)八点

問	一	二	三	四	五
得点					

計